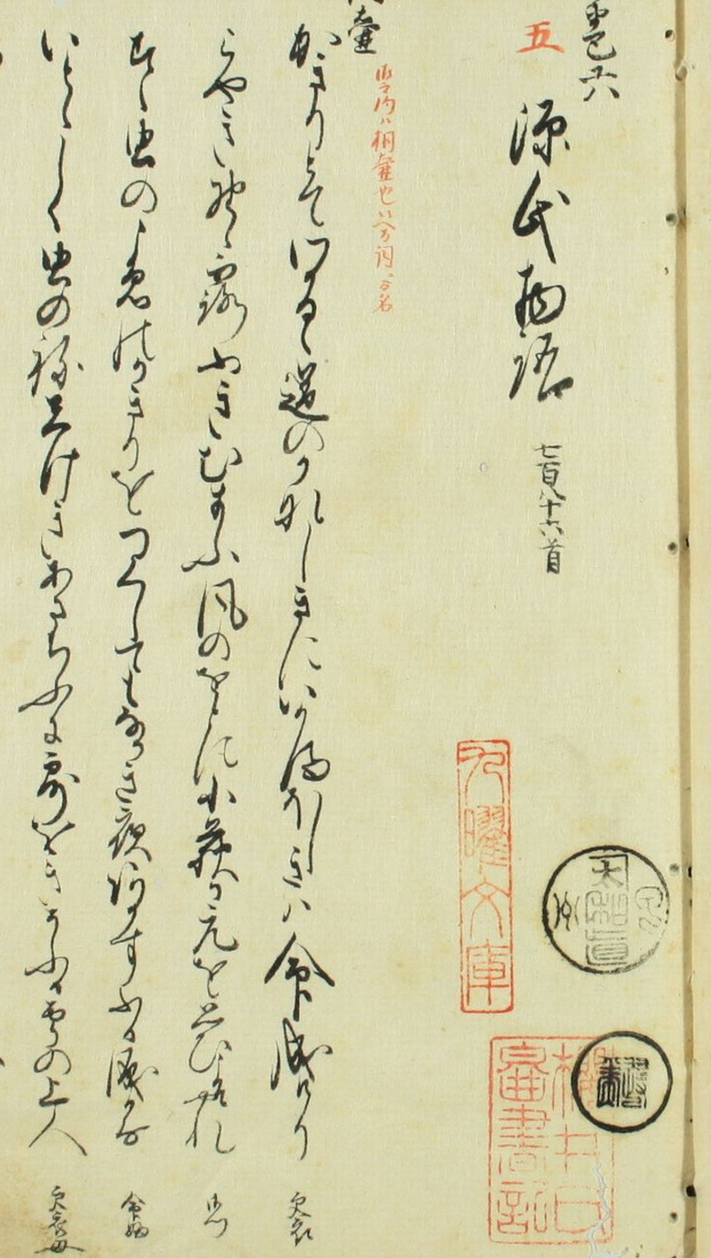
源氏物語

紅葉物語六

五　源氏物語

七百八十六首

一　相撲　山の内ハ相撲七八分間二名



内閣文庫
天明三年
神田白山
書籍之印

二

●帚木

むまひつる心をさきりてめしたまふ　左大臣

ものとおもひてあはれとおもふ　馬頭

うきなかとおもひしるまでこそ　馬頭

琴の御ものをとりてかなでたまふ　左大

ものの御ものをとりてかなでたまふ　左大

ものの御ものをとりてかなでたまふ　左大

ものの

おく心の程のうたがはしさにたへぬ花のうへとうたがはしさ　智

夕まぐれかの小倉の山ぞとてけさ京路のちぎりつるかな　保

風とはや花のはなちるあとのけさぞ雲ゐ風ぞ吹ぬる　尼

あくるかとまちこそ侘しかりしかど　保

あくるかとまちこそ侘しかりしかど　保

あくるやまたはるとし人とゐねもしなるのけるるん　保

ふるうてしあきとすしの山のれわさうかつけとまつ　尼

見てもまきわかるるあのうちにやてきき秋ぞ　保

世ようて人やたまもしなるはのうさ所とまねあるかて　義

いとけるうたつれひとあきしるをけまふるむおえぬ　保

てるたにそのうもむ世れ物ようるの人のけりゆしは　日

三 空蟬

うつ蟬のかとてけこみ人のあるとの人のあるかしの　保

空せしれうとて家のうたしのくれかうてれうて　義

四 夕顔

人ひてうたしそうる白家れえうくる夕ひのうか　義

ようて物うれしもかのくうるるの夕ひ　保

さ花ようるてふみたてあてうさけされ物ひ　日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

紀貫之

花エン　梅ウラハニ　ハ紀貫之トアリ　ナレモ　ヲアヤ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八

花宴

五位エントアリ　又物ノエンゼヤウセウ云ヘ

大ぶこに花のまさりてしもうゝ心のそれまさりは　花宴

紅織履　三ノ口ノ口ノ口

人の世とあくがれそうし家けふそくを袖とぶひきアれ　宮柴

ときの者と清もとの一家の世を心とてんかうとかさ　原

をとすうちをうを空のうきてといはれのうとついてあつむ　秋中納

うし人の為とあつ所　ちてねさんいく　まてはよっきてすい　原

第うしの乃まうきにのうるをてことはの行　秋のさ清る　原

ぶもしえ　中く油とくすかうふかわしうやまをてこ　大よ

はうてこの第をて袖をて家けれ物うふ秋ふあまさ物れ　原

わうき言をたちをしぬをてきしうをてをていうふ　秋ア

をうをむういしるをよ物　家のあうはさ四るしな　原

うみをてちうはうゆるとこ夜のつをうちうしくねはん　日

わやをうしへうをるるようとうねをすいはは行中の夜と　日

十

賢木

なをうしはけふあうなうしうちうをは後うをする　原

あうしき年をいをするあいうはをうあうり　大よ

うしはなは言のすをるをあとうるまをいをおはるをうを　原

なをちうあうとをる八をうを世のうとをるをしとをれを　日

暁乃はをるをつはけうをとをはうをあ秋乃うを　日

大をの秋乃うれをるををねををうのを乃松世　宮柴

中はりををつ中を心あうははうねうれの中をとれ　原

をあつをうはをを中をうはをうをとをやたをむ　秋ア

うを乃ををををはけをををあれを心のうはをあるを　宮柴

や行をはけをを物うをすう川やをせの後を袖をれや　原

をうはの八十帰のををしをねしををいせををたはをを　宮柴

秋ふかとなるわもやしけ秋もわ夜山とさうか陽う　原
かけひろしたなら松やとなむきい紫ちう秋年の陽　寺下
きえにる沈のうしのうやけふふるれけとしねうのき　原
うらうれて心のあしこうらうふとけのあ老秋　倉橋
心ろうふ神とゆもうかわうとしあ声ようけさ　腎
うけ清ひはうてすせうむねのわくへうはうかく　原
うふしのうき沈けうふしいまいうとうけうへん　口
うう世のううと人のうてうろ心とわとううむ　義
あうちふれ方のやうよ春ふれ日のわうりうろ　原
風秋ちまううちいろうもわうちう家けううしう　家
けまいうこ月ふううけうのわうれと夏中ふなうふ　原

うれうや江ふうしゆたうう寺ふ尾更　なか
九方ふうりや春ちうこれうの風とうるふ心ひふ　義
月新ちう世のわふふうねとへううれううふ　原
ちうしのうはうて波まふれうるうのうちと屋ふ　形
ちひうちうのあ風とるへうの秋のけ白しやうる　原
別のけふれううへうふうとうとうたの風ひ　口
かうふううちうれうけふうの夜ふ逢ううし　義
月のすひうのとううきふのやうにるとやうむ　原
ふうれうふけうふけていへうとうひうさうへふ　義
おうのうわまうれとううほうふかうう板うう風　原
わうしうの春ふ春ふ風ふうう波のううしうと　義

十一 花散里

十二 須磨 同ニスミトアリ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とうねの命ようてめまへのはるとそうてうつ第上
うしをの武蔵野しるへもしらぬ草むら原
なる里とうねのすしの原さうしとかつもるそのふかの雪ぬう日
はしまのいるれさまをしいるもしすのうへをかるひ日
うり浜ちの海のうるはしゆうさとをやいはまやいそんに原
拾ふことをやこたへ松浦ふらゆるうはもかけさとつし義
うはしくはまちにつし意のはなの雅よりもうはなき形
うへのをかもし神をうへをかるのうちと第
うを見るいとのわまをいひやれりかをふすの海ふて寒示
信濃海てをかしのうたにわをうてをいをふひをは新やかり日
いせへの波のうをををはうをををはをのをのをの原

あまつをしるけをの中ををかをれて沖をの浦波原
はけをまをる新の上のふををのをけをしをのはをうをれ花ちる
恋使をのはをまふ海波いをををう風やををし原
初をうふ先ををさへのををるれや猿のををふををのをふ日
つををうはしのをををふゆをうはれの花をのはをを日
四をうをををををををを雲れをうに ををひをうる 元ちう
をををををををを

十三

明石

山ちかきかりにはなれもことにあはれなるなかに人原
いろこの中なる秋ぞまさりける月のうへにもちて日
うきまさりするかりがねの鳴きわたるこゑ暁をひとり聞給ふ日
いとあはれなるに人の家にはかりにてはなれたるかりがねの
なきわたるこゑいとあはれなるに月のうへにもちて日
なきつるかりがねのこゑにまがへてとりあつめたる
ものの音ども立まじれたるやうにいとおもしろく
雲ゐにかりがねのこゑにまがへてとりあつめたる
たるなかに中納言の君の琴にてかりがねとおぼえて宰相
ちかくきこゆ海のうへにてひとりきくはなほ
やとりの水とおぼしたるにかりがねのこゑにまがへて
うち風にいとはるかにおもしろきに袖ぬらしたまへる光源氏

海はるかすかれたるけしきにてはしのやとりのあはれなる
ちかくはとおぼしやるかたにうちそそぎたるこゑ
いとあはれなるに海の波はるかにすさまじきに
ひとりねをしたまへるに物のこゑにまがへてかすかに
琴をかきたまへるの海にひきあはせたまへる
琴のこゑにまがへてかすかにかきたまへる
なかなかにいとあはれなるこゑにまがへてかすかに
ものの音にまがへてかすかにかきたまへる
ものの音にまがへてかすかにかきたまへる
ものの音にまがへてかすかにかきたまへる

四ぬふやうくまつる四はいつまでとをてついたるらん 四宗
たかくともまたをうとうれあれらるはあまのすさこるれ 保
うかとをひるるかちきうとまやうるはこえてあやと 宗
みしひらつることとりはやく独をとるうふるしむ 保
つきうてあまのうりのとをいみをいまとうしきうるふを 四宗
かをとうふるのあれくやうひとをとつをねにうをれ恋む 四
逢まくれをくふちうる中れとのをくにをうるをむ 保
ちををうをとあをしを海流のおうりいををまをしやるか 四
うくつるごまやをわれをうを波のくるこやをとたらくまう 四宗
をる流ふをちうをは旅衣ををけらく人のいををむ 四宗 人麿歌集
をうをはうをくうをあをとの日うすくをむおうのうをを 保



冷標

をとうをこをうををうをむをあをれは海をと云ををあれ 人麿
うやこ出て云のをけさにををのやうをある海と別ぬ秋 保
をうを海をまをくうをれひるのこれをうををうを八ををうを 保
こををうをうをうををを別ををうををのをすが馬 保
歌はををの浦をあをうををを人をとおりをしやるを 保
すを海のうをにんをとうをををるを人のやをををを袖をを云を 人麿
をうををはうををやを海ををを袖のひをうをを 保
をををうを海ををを袖をを別をををさ袖にををるを 四
をうをけのはをををををををををををををををををををを 乳母
ををかをををををををを乙女子の世をを海ををおををいをのををさを 保
ひをををををを袖のををををるををかををけをををををを 四宗

十五
●蓬生 ヨモギウトウカズ

[illegible]

十六
●閑居

[illegible]

十七
●総合 エラハセトツ、カズ 総合ノ事ハアリ

[illegible]

つるをそなるふいしひとともうてのいまはなのまよ 秋夜
ひとりのそ[illegible]ちかわあまのすむるとうそ[illegible]ぬとうるる 紀
うさからーそのたうるとしてまいをとしさにるゆう 保
いそのうしのかうさ心とたうまてうけ沢とはやけいを 文治
雲乃らえよまいしのわもるをいよいのひちの庵もるうにうる 大武門
らるあ[illegible]他うかれぬるあらうへかいせそのわまのゑやちあん 藤原
舟ちをかくちをのかうあれうのうれ人のうちとをうしもせす 朱

松風 六

志賀のちかむーまわるねのうて米代のとし人今ち歩まよ 秋夜
ゆくさをとるふいのうは侍よ人ゆふいの風ありまり 人丸
しうをにやこいをうをこのうひやひうう野中の立はん 左
をまをまあひんとをいるをかうをもうねせをはなの月ん 紀

みさにうるうにあまは乃うむうふこをはるるか 左
いくをうりゆをふ秋をもをてうきあるのうて我をるうん 紀
男をとうてひうをうをは山里にうをまつ踏うをく 左
る里をうせのををと恋をさえをるをとをはるうん 紀
すをれしへいうてたれしみ花やのあーふ馬 左
いをのいをやくのをもはれとりのあるやなをうせる 保
奥りしにうをねをのをくうをたをねはのかをとをうをや 日
うをうしをちをりしをとをたのうにをは松のひをふねをとへか 紀
月のすむ河のをとるをまをれいうをらのあ人のけるうん 源
久をうのひうをちをさんのうをてあをゆみうをれね山里 保
やうををるをうをやけうをあをらの海のあををうる月 日

十九 落雲

雲ゆくさこ山の道をたどりて
ゆきまるさうの山と見ても心のうふ沼をゑめやも 光
末ことゝふ雲の松ふひさうらし岩木さうけとる人 雲
そひそりゆもすれいけ海のねふふまのちとをゆん 原
毋ゝもゝそうゝ人のうふねをあすうゝむせをゝ海ゝ 紫
ゆふてこゝゆわすとまゝ中くにそうゝ人心とゝと 原

八日さす光よるひくうゝ地ゝうゝ神よゝやまゝゝる 日
春もゝは気とゝを人ゝを歌光にゝゝ秋の夕風 日
いゝゝせゝうけるゝねゝゝゝ井ゝゝゝるゝゝやゝゝむふゝん 雲

十 槿

あさゝうゝねゝきゝれゝゝひゝとゝゝゝゝゝゝゝの新ゝ海 日
人ゝゝを水のゝゝゝと海ゝゝふゝゝゝゝゝ世とすゝ 日
おへて世は義ゝゝとゝゝゝゝゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝん 槿
うゝゝの音ゝゝらゝゝゝ槿れ花の唇ふゝゝゝゝん 原
秋ゝて音ゝゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ槿
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ槿
幸ゝゝゝとゝの葉ゝゝゝゝれゝ槿やゝゝゝゝ人ゝゝ 宮
身ゝとゝて後ゝ海ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ原
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人
ゝゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ日
氷ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ槿

かぶりつかて若恋しさに表とうあるとのうねつ
ぶしてねね初えんしさいあのうふもとかけ
ゆきさんとそふ心よもせこしてけらねみれ
ゆまとん

十二 乙女

ちう夜さいかるこふまふけふうの世と
さよかうになりいけるうるまて恋ふとそれよりも
紅の涙ゆかさ袖のみとわるこうしやいとるへま
ゆうに男れうさかのそるかいるうある中の夜
京氷うたてむすんるゆうれの方うまてかるさ
わかるますこるしかのふへしわ思すとるする
とかるあとおしかるこうたのもうしへ
うなそふけのこうおかいかるひけの京れ神ふけ

日
久曽
原
樓
冷泉
松浦
第
好うし
あてき
交流
みと

日けにもうけかるし女ふうあまれ神ふけ心
雪のさえたる春ハむしはそむまし花のけうるる
九重とあ海ゆすうにと春とけうるれのあ
いすんとかさうへうる花竹ようさえつるの春さんつうね
雪れむしとそもそうふふ月やわをたる
心ふ春まうはをけやの紅葉と風のつけふふよ
風ちう紅葉ハうしふの色と黒ねの雪にけて流れ

十二 玉鬘

毎人も雅とふうかう流れ流るふしは乃さ雪
まうさもしぬとうにいてわれいてうまと高尼
ちより心なはは標佛ふうるの氷とけくちういも
年とていう心のたひるを流い氷とつうしやらん

●十三 初音

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花うの乃こゝろふとゝぎすまて、ハまて出ハなくらるゝん 家
こゝろふにとさうハいなを海心ありて八重山吹とへてきをハ 松蔭
うふゝとも思ハなくしかりうゝいとゝるみに色しゝ玉ねを 相木
妻のうちにねつゝうゝたけのよとたのうゝ海やとひらゝ 原
今ゝにいるゝむ世ゝ口行れとひとゝ風ねとハたゝねん 玉ゝ
橋のかり神ゝふなゝるゝ方ゝかゝ人ぬゝ 原
神のゝをうふゝるゝにゝちむのしゝへゝゝ成ゝゝゝ 玉
うゝけてねゝねねとゝ口ゝのゝゝわゝかゝむすゝかゝん 原

文
●蛍
なくゝゝゝしゝゝゝ人ね出のゝひゝふ人の西ゝはゝゝゝのゝ 蛍
ゝゝハせてゝとのゝゝうすゝ蛍ゝゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝ 玉
けふゝんやひゝくゝゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 蛍

あゝゝゝれゝゝいゝゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 玉
其ハ海もすきかねゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 花ゝ
にかうゝにけゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 原
ゝひあゝゝ若れ沼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 原

五六
●芝焼
すゝゝ沼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 月
ゝてゝこゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 玉
心ゝのゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 原
ゝわゝしゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 玉
ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 幽玄

五七
●舞火
ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 原
ゝゝ火ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 玉
沼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 玉

六八 ●野分

おほつかぜ萩の花ちるをのもの　しきなびかつまもいたはし　四八

吹きまる風のけさとふもとゝ　ゆくへもしらぬ空にちらすな　玉

下葉有　あひうまかへとふかへ　わすれは　原

風さへさむしもまふ夕に　とゝまるくさ　ゝ　夕

六九 ●沖幸

初田山　あきつとなる　松原　ふかうの　沼やふるらん　原

うちさゝわさうせ　あきにたえぬ　ふるひ　玉

あはさすひろハ　ぬとおてあさ　原

ゆくえたにひろ　ゝ　六文

我ゆとせうらし　衣もつたのふ　ゆしハ　赤つむ

ゝ衣まさまうゝ　ゝ衣ゝ　原

うゝ　ゝ　四六下

ゝ多人ゝ　ゝ　原

七十 ●義禅

おなし野の　ゝ　久吾

たつゆ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

いりせ　ゝ　ゝ　ゝ　柏

まこ　ゝ　玉

ゝ　ゝ　ひけ長

七一 ●未詳

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　原

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　玉

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　原

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　玉

心さへ京まさりし君もなし　いとさびしかるべきよの秋　ひけち

ひとりいくこころむしの梅のうへまつかのほどろ　五十嵐

うきこと成ひさしけいかくに白るけつろいとまろふ　有

いまはこそやとりれわたるまのこらハ秋と春の　松花

あしきさはかしいるもたうたちとまるへきまの花物　四方

こもりくといしまのもしもそりれけむへらるかをねよ　重志

源山まるもりうかしつのいろのまのかはさい春ちるふ　秀々

いろのしみなもちねはなとうてそひとハうかを見れ　玉

白清はかうのむお有

かそうこもしわひむさは第と心よさくこひうかをし　四製

九重に京限へそハ梅のうたたうもも白ひこうや　日

ハもろ風ちつけよ花のえよ立ふへよ白ハかるる　玉

うきたれそのけさ氏乃まもるつ人といふもの山や　原

おりすの新の京に神ねてうる人をもるや　玉

学ちすよそのりたへうるいそうるやまかのも　原

そのはるうひのこねるふいるる人りにはるれ　日

次うれすはとあるぬうのことろにるしうるする　元禄

ひさ清文ひる人浪ふたうるきしうるもこまりるよ　出定

梅枝　同梅枝とうしよう

花のうはちうに枝ふ人もかをハねうた孤つひきて　久音

うるしをのさはすうまれ神ふあるくをはや　洛院

うれ人ふいしを心をもひ人のうるんうはたくわ光　原

学のうにはやいしあるれんしうる花れあるうれ　宗

ふとかとうるうにうるいい　宿とれすもあるふ　原

雲のはたての花もうしくまてかと　こうはの宿行　拾遺

心ありて風のうつす花のまとうてわくらはやまこゆきき　タ

春ふかみ風と花とをとへてすは桜のるもかちひかはし　拾遺

花のとをちかくは神よりしてとわやはしいやうわし　宗

ちとせとかてくしかうしむれのあさとさてかへらもい　同

つかるはいくとあの常にかりめとをれわく人やひとあ　タ

かりうてはすれはとをるもうやせうるしく心をうん　宗

引宿はは花のぬいさたうはたりもやいこわをのおうと　後拾

あくしようやまとはむやちのうたうはたのたうはたくちう　タ

しりさふかとはけしむ花のくるまつうすをうはたはも　後拾

いくうう春はけきをとすてまて花のひとうあはは花　タ

たとやかの神よまうる花のちからひとやあすまうしむ　拾遺

あさきふをとひかりしかはしかはいかはしかはしかはは関のはうは花　宗

りはりうをはは実とはりうはあるさふかはしかはとあ　タ

らうしむかよはうしはうはりてはしはは神のうとと　同

なにうはりはのうはしはうはしはあはうはしはりはは　久音

かはしてもうはたはうはるのるはうとあり人やはるむ　後拾

あさみはうはのうはとかはにはしはは神はうはけはうや　タ

やさはうはかはうはうはしはあはうはしはあはうはは　宗師

なれはは花はうはあるはうはは春はは　タ

かはは人はうはけはかはうはは神はは心はやはれはうはは　宗

うはうはれはは年はむはうはは　（まはは）はうはけはははは　宗年

いつしかとうけたまはりたのしみやすらう　さくらをせんの末く　宇治拾遺
久まさるまうしの乃ゑ　なりくよ神ちうけし秋とうかく　原
紫ハ　ちにはまつるさくらの乃ちるかにうつさきうめのかをうる　枕
秋とへ　三月ハ　四月ハ　五月ハ　六月ハ　七月ハ　八月ハ　九月ハ　十月ハ　十一月ハ　十二月ハ　朱雀
ゆたかなれ　紅葉　こやうの　ゑ乃なかにひる　花の　ゆ　と　冷泉殿

皇四
美世第　上

さ　ゆ　ゝ　ま　と　今　ま　ま　ま　れ　い　玉　の　と　て　ま　ま　し　さ　ひ　よ　言　枕草
さ　ま　ま　ま

[illegible]

世を捨てあまの浦よりしほの心のやしほぐりけりせ〜 四条

ひさし出し暁ちり残るかりの今ぞうらうらのゆかりする 公任

いるかたもよもすがらの梅となりてはなりはせぬ 柏

ちぶ山まねてさむるとこうちいそりもの多るわくへなく 夕

うたたねかりねのけさいたしてあるかよる花の夕氣 柏

八重にいろにかりて地心はてとそなれぬ桜て四けさて 紫後

五五

●美葉下 [illegible]

えいらるる人のうさとてのもとをなれよ行んあるかむ 柏

[illegible]

すしりはいるるあるかぶるとうるたまけふやるん 屋素

むすはせまるすれぬすこうれ水のうるとるにけてと 朧月流

[illegible]

[illegible]

世乃[illegible]

[illegible]

[illegible]

まさしといてうらんこゑ　しうすほうこう乃声　原

丈六
●柏本
あふみなるいそとそひとそれひむかしの浦いさりせし　柏
いまだ空そとそむけかすもしをかれたるねぬの野や秋風　柏
ちりうしてさをやさるをの海うらうことをおいの秋をけむり　世
秋来るふる乃乃ちとのねとはあるうちなる花　柏
なる世にうらねはまさしとへ人はしいう思ひの松こそ　原
はしあれいらうねぬよりうえれみ　やの秋し　久
ゑ春はやるふ乃ふうむうもぬ咲ちる花の白波をねハ　宮案
本乃ちの乃ちにわれてきうさ海ふ波の衣きる春　後拾下
ゑ人をとうてうもちすて名乃ちすしきみさ秋　夕
うちうや波の衣波ちうと春うう先ふ花乃ちりむ　鶴下

ことのうハふるしの枝ふあるさ袖しをもの秋はゆうあうさて　夕

丈七
●横笛
うもまふよ乃ちの乃ハふまさすうう人ゑすへふやの本末。　為尹卿の説
世をいれ入ゑし道ハとるうふ乃一ハ春をたるふよ　朱雀

うさ世にをわうねうう波乃ゆうてうむく山海ふ波世　世
ううふもはつれもゆうれ乃ことはまてうさゑのにうう波　原
こうふ出ていうねとうふ塔ゑとハうちたるけうさとうう　夕
ちうう波のわうれうハうふとうとうふうえやハ山ゆ　為家
ゑ海ふけうしてのやふいわ人の秋ふううね出乃ゑふ　宮案

うこハ花のちうハふうふうねをしのくやしねをつうさ移　夕

丈八
●北出
為行ふやうさう風のとゆうハ末乃ゆうれゆうれハ　柏　出典
ちうハふとおのううて実と　て四のううりふうう海ふ　原

[illegible]とうてもきうくやすらはしたる　廿三
大空の秋とはうとうかすみてかすかに松のこゑ　日
ゆりくるのやうといふ人れ物すゝ出の声ばかりを　俊
雲のうらゝとうけるのしらすうにもあらぬ秋の風　沙弓

久寄　山里の表とうふる冬ゝうにはちいてんかきこえて　ク
月ゝ雨ふるしゝ中斗まこゝろにうけ宿ゝの秋ゝうにはゝ　俊
山ゝのまゝとこゝ光てたゝ音ゝ心かゝる人ゝゝうす　為家
我のゝうくゝ世とゝうにはゝゆゝ行ふ袖のゝとゝすゝ　り
おゝるゝうにはゝまゝこゝりねとゝさゝとすゝゝうにはゝ袖のゝゝやゝうゝ　ク
とゝゝうゝゝや新ゝの家ゝゝはゝうゝゝやえゝゝゝとゝうゝゆゝくゝゝ　ク
うけゝゝうゝゝゝの家ゝとゝゝうにはゝゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　廿三

ゝゝのゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

法法

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うき世にたゑぬ言の葉ばかりぞ残る　保

ちるそらに花のあるとみるまでに雪ふりかゝる冬の空　日

人はいさ心もしらず故郷の花の香ばかり昔なりけり　貫

ながらへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞいまは恋しき　惟

うらみわびほさぬ袖だにあるものを恋に朽ちぬる口もしるらん　家

夜衣うちかへしてはけふもまた恋しきやとぬ　雅

秋の夜のうすきふすまのうらさむみ衣かりがねの声ぞ聞ゆる　惟

きぬぎぬのなごりをしのぶ人しれぬ袖にぞ秋の露はおきそふ　雅

大ぞらにいまはこしまて世をのがれ雲ゐのかりの行へ知らばや　惟

なき人をとゝのゝ月の村雨にやつれぬ袖の露ぞ　日

はるゝなきにつけてもなほたゝぬ袖のうへ　夕

作仏ごとにつけてもなほ友の目とかとゝまりもしの声ぞ　保

なるとなるほどもなくなるものゆゑ世のうきなかに住まぬ　日

世をのがれ雲ゐのかりの庵にそ月の座よりゆるとさとふ　日

見ぬ人ぞ秋の夜ふかしはなるとはなにのそとしれぬ　男

人ゝの秋ゆゑ物思ひけるとおもふ人ぞ物思ふ　保

りゝもとゝのゝ虫ぞ秋ぞ　日

大方とゝのふまゝに見まほしよ　日

夫人ぞものゝあはれにうくけふ見てもそゝるなる　日

そのゝ山ぶしの人とそゝ泣とそゝるとまふなる　日

うらつゝてうるゝ心ゝ山ぶしの秋ぞとのれ　日

去まゝての命とすゝ君のうちにいろはく梅いけふ院　日

七卷

雲隠

匂宮

竹河

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いろこの方は必ずまつとねぶさてやなさん方のしらく　蕉
ほよろのあけわくハやちれ花ちるまる又とこほや　蕉
第のいろハうくとちの花ちるに名てまもせうきれ　孤雲
作法のうれ夜のこはこひいるやきふとうのうハ名れと　廿三尾
ちるしてのたのかむ行のよハうあとこひきまき　蕉
うちすてつしかりにしかるこの世ならとれ桜　ちとり
いそくすちけるとすふにきみるのちうとうる　大
ちくもちねうちするちくに我うすりにるへうる　中
うち人も宿もけうにかりとなて我ふれまる桜　八
世ていよ心やまふかくとやちるもちやへうる　玲
法人て心すむしとなりにはとせとうふしやとそれ　八

●梅雅　（宗法十帖ト云）

やまおろしに人ね手のふれ方ちしあやのりしき稍　蕉
ありうるを嵐ちとすたうねうまもすたうまのおくこれう　日
雲のいろ岩れけ海と秋されいとへるちかてるれ　大
うれの心とくそたうをたれのうてに袖ちれる　蕉
さうるを法の川をきあ名れ車や袖とうるれ　大
みまくようの世をうむしく恋うもうにうるて恋うる　柏
いのちあうハうれどとこもまく人ふれ思ねとちれのとひ　日
うるれうるさうふれ人ふきかりうせハうせのたうとうせま　白
りとうれうれへうる恋袖れいうるもうぬれとやちれ　綱
花のうと小うとすやうとかゆうハ文にうやひのうちし　白
山風に京やうとへうるこうの家　公

●紅梅　（四ニアリ）

●椎茸　（四十六）

そもそも花の咲けば散ぬるよりなほ恨めしきは白
山桜かりのあるうちに霞まてとのみ思ひてをるに日
さそはれて花のたもとにかかるれとそなぬ春の夜の人笑
我なりて春は春とあれねとこの一とせはかりこそ恨なれ日
いかなるむしやうのちからにかかりしかとも春の名ち蓋
そもそも秋の山里いかなるむしやうのちからにかかりしかとも夕くれ皇
後のしをりなるへき山里はまさに春よりもあはれ蓋
鈴さうにはそもそも春はあはれと大方にはあはれ義とそ白
文にそなるわらとそもそも春深しやつも袖とぬれやれ蓋
いかなる袖とは夢のやうにはかりて秋ゆかうにとはかりにとはかりなき蓋
秋さりのあはれは世のふかいしかしこの世とはとはかりなん

春なりて春の花のたもとにかかるとはかりなき蓋
そもそも春の山の桜にはかりなるとふかえにはかりなるとふ中
ゆふやさしき山のけしきもあるとふ沒とはかりなき蓋
はるかにとはかりなるとはかりなるとはかりなき蓋
たちうむけとたのうの桜のかもむるしき蓋なるとはかりなき日
きみのとる業はかりなるとはかりなるとはかりなる大
ゆきかうさきはのこすうはかりなるとはかりなる中
はるくれのうの宿の桜とこのそはへてはかりなるとはかりなる白
いつくとはかりなるとはかりなるとはかりなる中
あけはるさにはかりなるとはかりなる中
ぬきしあくすはかりなる後のあのとはかりなるとはかりなる蓋

●角綴

山里はあはれなりけるものかなと思ひつづけはべ　基
多の者どもなどいとまことしくはあらねどふる　大夫
まのえとはいとうるはしくふる山路よりはかなきなどといとや　基
山びかれるもの心をはげましうちふるやかさまるらむ　大夫
きりかけさまたのあはれ女房心とうとそうる人はら　基
女房もさりとてはなとやとうて四せくや五ちとゆかん　白
きりかへ秋やうりてもまふ食心しゆりあけれの道　基
ふるはてを心とこひやれ人やとうねたまはてうて　大
うつひよりこひやるうん家ものさ道のさ家らてうて　皇
きよ衣されるれきたいうとうとうとうとうはみすもし　基
角てかきうるうるうはかりとうし祇ふけうとふ　大

中たえしれかりたりに川柳のうくく神やうるにはるん　白文
たえせーのはるあしるやうう指けるきさ中と流るへさ　中太
いりやしと花の唐ふひちうう本のかう人や秋をひむ　原宮
桜をしいうまれさたかよ花し紅ようはうね世と　基
ゆこうり秋を物風山里の紅れけかすうきれと　大夫繪
うう人とかさ山里の黒うに四るうもうる河る　中三文
わきをてこひはまうる本のかと依るうるの松也　白
みるのねうんりのうもいるはるれうる四うれすし　日
うむいはるりうるて　り
あれる源山れ里と紅りよりうむ方はうるて中
ちとうる河のるうるうるひてるねるうさ紅りけれ　基

わが屋の内をうちとしかすめる梅ぞ人の心とやまし　中

かすみ日ごとにとをねとそらにわる　蓋

紅ぞうるおきてしかうはるるみの色とうめぬるうり　口

をれしとて行月とまてしふるつのうすむ〳〵さこの世のはい　口

恋ひてをわ〻なりの家まよ高れはにや沼とけ逢　口

きしとをしるもとうるなこと行まけてるにあむしを　中太

行末とうるうるねとをしるはかれ人よふうむうるん　白

春をたてあまこ人をとつうふつひと高れはうるひ　あうう

の春をたれうるんなうるこ人のうるしにつう巻のまうひ　中

初人乃四ようの花るれやあ見に出て手ふに行人る　白

うる人よかとをるる花のえと心ってをとへうりれ　蓋

うれしやをしれうもたちまち花のひとくとうるを　蓋

うる人とあうよまをの山まよ若とかゆるうれすれる　中

をうをの梅をうるわ月あをねあうふやをうの　蓋

きをほうるるのれうを者とうけを人をとれぬのうの逢　ケ

月とうけむ風のれうをうるをうをにうれを　蓋

人にあいうをうる神のうるれひうのかとうをあまを　ケ

をうたをあまれ夜をとうれやうを行うをぬを部神　中

ありのれいうれうををあるをとうれうをうをまこ　赤

すうたうを高ををとをうれねとけふふまつもゆく心を　女房

をういれを山をうをて行月を世にすを後て心をいれ　中志

をうをををれうをのうをにうを毋のまをのねをあひうりのを　蓋

四十五 穴穂先

[illegible] 芝
[illegible] 仝
[illegible] 芝
[illegible] 白
[illegible] 中
[illegible] 久善
[illegible] 中
[illegible] 芝
[illegible] 中
[illegible] 芝

[illegible] 芝
[illegible] 白
[illegible] 中
[illegible] 芝
[illegible] 白
[illegible] 仝
[illegible] 芝
[illegible] 白
[illegible] 中
[illegible] 芝
[illegible] 仝
[illegible] 久善

五十 東屋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の雪汀のうりやとられふ道ふまていはて　白
やうらはるはこうるうらうらてうらうはけぬへさ　信
ものうるうるうるこのうらうこうるぬまて[illegible]うるうるはひさ　白
ふまうるうるはまひていうるうんはれぬうるうるさうるうるうら　基
里はるとはうるはうはいやまうはれうるのうるはいはまうさ　信
うるうるうるはうはうはるのあまやうるうて世てうるはうるはや　信白
はまうるうるはるはるは

九十三

はつ雪

あけぬとてはなちそめしかりがねの
なかるるけしきはなにのこりて　法華

ひとりのみうき世の中にあるとて
あしの葉風にうちなびくなり　日

河しらなみにうつるれわさをかへしてうき世をとうむ春の夜　尼

松虫の声とうちひてうれたまとうつの夜ふかまもしぬ　男

秋の月ひとつ西にかたむくうつるこころもとけぬ宿なこころ　尼

ゆうさ夜の月とあそんでうらさ宿こまぬ　日

山の月こりまて月とあそんでうらむ秋のうらまとあかしやと　男

うらもれぬむしの音に秋のうらまとあかしやと　日

秋の月ものうさ花のうらまとあかしやと　尼

ちるもてうやうの川のうらさをよかるひとしゆしこうしの秋　男

ある川の秋のうらさをすきかひしるとうてうの　尼

心うは秋の夕とうらひてうもる　神

山里のあされ夜ゆうさあはれ　男

うきあはこそひとうてうてうきあはれ　男

あさりのうさ夕とうとうとあはれ　男

かうりうとうひうう世中とうてうてうて

おもかるの世とうしさらるる花の中わ
うらうらとかすみのゆらとあるうちてとりけるとうけ
山里の春まれにはるつとうやとひさしれるまてなる尼
ゆきかきわけ人のとるるとなくうふ春ひとこそ
袖ふれしひとこそ花のうれてはうふ春のあけぬる日
うらんけしとまるぬるのとよとうふ風いとときあへぬ蓋
あすの夜のうちはるかたらわるしあるさはとてはまこと春
清乃夫と為の道とまとまてかすいねしよふしはとふる蓋

立十四
美濃橋
内

# 事

春車亭市場
矢寄随筆
金太
天明堂